

1. はじめに

私は、今回の研修で、ミクロネシア連邦チューク州、ピス島およびグアムを訪れた。海外研修ならではの貴重な体験がたくさんでき、現地の方の生活を実際目で見て肌で感じ、ともに生活することができた。日本にいと便利な生活が当たり前であるため、自身の生活と向き合うという時間はあまりないが、7日間日本を離れ、あらためて日本や自分自身について考える必要があると感じた。本講義、太平洋島嶼学特論の目的は「生存基盤の再確認」および「真の国際人育成」であるが、その他に個人的には日本では身につかないような、現地での生活習慣にうまく順応することや農学研究科に所属しているため日本との植生の違いを知ることを目的とした。ここでは、本研修で学んだことや感じたことを述べたいと思う。

2. ミクロネシア連邦チューク州

①. ウェノ島

チューク州ウェノ島ではゴミや道路整備の問題が。ゴミ問題は島特有の問題であり、実際現地を見てったときゴミが至る所に見られた。対策としてゴミ収集車や高床式のゴミ入れの設置、日本の技術によるゴミ処理、埋め立てなどを行っている。道路整備の問題としては、空港からの数十メートルいったところまでは道路整備されているがマーケット付近の道路は凸凹であり路面が整備されていない。これらの原因として、所有者の許可がなければ工事が出来ず、すべての人が道路整備に賛成でないという点が挙げられている。

生活としてはスーパーで売られているもののほとんどが輸入物で本の製品も数多く販売されていた。個人の商店では魚や野菜（キュウリ、ナス、スイカ）、果物（バナナ、カンキツ類など）、果実を発酵させた地元の食べ物が並んでいた。



1 舗装されていない道路



2 高床式のごみ入れ

②. ピス島

ミクロネシア連邦チューク州ピス島では、現地の方々と2泊3日の間、生活を共にすることで日本との違いを知ることが出来た。日本でライフラインと言われているエネルギー資源および水供給施設は整っておらず、ガスおよび電気はなく、ガスポンペの使用やジェネレータによる発電を行い、水供給施設は汲み取り式の井戸水および飲用水は雨水であり水道はない。このような状況では、日本で生活することは困難であ



3 ピス島での食事

ると考えられる。しなしながら現地ではその中で、日々の生活を送り、満足はしていないかもしれないが、笑顔があふれる中で生活していると私は感じた。またピス島から 30 分ほど船で移動したところにある無人島で、ヤシガニ採集やシュノーケリングによる貝採集を体験しました。自分たちの食べるために必要な食べ物を実際に、漁を行って得るということは、日本では考えられませんでした。その為、現在の 24 時間営業のコンビニで好きなものを好きな分だけ買うことのできる環境にある現在の日本のような満たされた生活を見直すための良い経験となりました。しかしながら、ピス島でも近年はメインの島であるウェノ島からお米やインスタントラーメンなどを食べて生活しているということでした。

次にチューク州ウェノ島およびピス島の植生としては熱帯雨林、マングローブが主体となっていた。果樹類は熱帯果樹が多くて、バナナや、ココヤシ、マンゴー、パンノキ、カンキツ類などを見ることが出来た。特にココヤシ、バナナ、パンノキなどは特に多く様々な場所で見ることができた。マンゴーは道路沿いや民家近くに見られ、日本で見るものよりも樹高が高かった。バナナは日本でよく食べられるものと比べると甘味が少なく、酸味のあるものが多かった。ココヤシは果実が緑、茶色、黄色と完熟時の色が異なるものが見られた。パンノキは葉の形が異なるものや果実表面の凹凸の深さが異なる数品種見られた。パンノキは主食として食べられ、栗とサツマイモの間のような食感と味であった。

3. グアム

次にグアムではチャモロヴィレッジおよびグアム大学を訪れた。チャモロヴィレッジでは塩を作っている様子を見学することや、ハイビスカスやココナッツなど植物の葉を利用したうちわや帽子などの制作方法などを学習することができた。また、建物などからもチャモロの生活や文化を学ぶことができた。

グアム大学ではイノウエ スミス ユキコ先生にお話を聞



4 グアム大学での講義

く中でグアムの現状を知ることが出来た。グアム大学では、大学の教職員の採用や重要な役職などは先住民であるチャモロ人が優先であり、学長や学部長などはチャモロ人が多いということをお聞きすることが出来た。その中で、イノウエ先生がグアム大学で教授として活躍しているという現状は、日本人の真面目さからではないかと考えられ、日本人の真面目さは誇るべきであると感じた。グアムでは日本とは異なり、専業主婦という考えはあまりなく、男性は日本のように料理や家事ができる女性を求めておらず共働きが一般的であるという。そのため、教育学部では 80%が女性であるということだ。これらの事から、男女共同参画社会のために日本に何が必要であるか考えさせられた。そして今回の経験から、国際社会の中でしっかりと日本人という誇りと、国際的な視野を広げていく必要があることを学ぶことが出来た。

4. おわりに

今回初めて海外ということもあり、全ての経験が自分自身を成長させてくれたと感じた。今回の研修で強く思ったことは、他国の方とコミュニケーションをとるためには英語を話せることが必須であることでした。しかし英語が話せない中でも、ボディランゲージやコミュニティー内での生活習慣に従うことで適応していくことが出来るということを理解することが出来たため、今後どちらの能力も伸ばしていきたい

と思った。今後様々な国の生活習慣を知り、実際に体験し国際的な視野を広げていきたいと思

った。また現在の日本のように現地では電気、ガス、通信機器および水道などがない地域もあり、充実した生活が出来ているのか不安であったが、実際に生活してみると思った以上に不便な暮らしではなく、充実した生活を送ることが出来た。現在の日本のようにすべてが満たされている生活だけが幸せではなく、今回訪れたピス島の人々の方が人と人のつながりが強固でいきいきと暮らしておりとても幸せであるように思えました。これらのことをふまえると、私たちはこれらの生活を変えようと思うのではなく、人が笑顔で生活するための価値観が異なることを理解しなければならないと感じた。最後になりましたが、今回この研修を組んで下さった山本先生、一緒に研修に参加したメンバー、そして研修先でお世話になった全ての方々に感謝申し上げます。



5 ピス島での記念撮影